リレー企画 ＜不思議な夢＞

５番目の語り手

予知夢

ｙｕｋｏ

「驚いたわ・・突然部屋を飛び出すんですもの。」
私は彼を病室に見舞って言った。彼は虚ろな目で私を見る。
「Ｓ夫人が心配していらっしゃったわ」
極限の恐怖は人間を変える・・一夜にして老婆のような白髪になってしまった女の話を思い出す。まさに目の前の彼がそうだ。
「もう、あそこへは・・」
行かない方が良いと言いたいのね。私は彼に優しく微笑んでうなずいた。
その実Ｓ夫人の魔力から遁れられない自分なのだと解っている。
「あなたには不思議な力があるのね」
夫人はある夜そう言った。誰にも打ち明ける事の出来ない心の内を見透かされたようで驚いたが夫人になら、この胸の鬱蒼とした思いを話しても良い気持ちになった。話しても良いというよりも打ち明けたい、どうすれば良いのか答えてほしい。そういう思いだった。
「東洋人は神秘的だわ・・特に日本人は尚更・・」
Ｓ夫人が私の目を覗きこむ。彼女の青い瞳に私の顔が映り、そしてその私がまた私を見詰めていた。
黒い猫、赤い首輪をしているので、それが「ミコ」であると気付く。「ミコ」はいつもそうしているように、ニャーンと長く鳴き大好きな飼い主の足に擦り寄る。眠っているの・・違うわ・・その足元に広がるのは・・血の赤・・そして、その横に立っているのは・・亜樹。亜樹が見下ろしている、すでに物体と化している正弘の足元に流れるおびただしい血液。「ミコ」は正弘の足元に擦り寄り、その血の海に鼻先をつけようとする。

「だめ！ミコ！」
私と亜樹が同時に叫んだ所で夢は終わった。夢だとわかっても、私の胸は不吉な思いで揺れていた。
私は正弘を愛していた。正弘が親友の亜樹と結婚してからも、秘かに彼を愛していた。それは私だけの胸に納めた思いであった。亜樹は事あるごとに私を新居に呼んだ、美味しいケーキがあるから、新鮮な食材が手に入ったから、頂き物をしたから・・・自慢のキッチンと寛げるリビングで、幸せそうに笑う亜樹と微笑む私。正弘はそんな私達を楽しげに見ている。そんな構図がどれほど私を傷つけているか、知りもせずに・・・

そして・・私はそんな思いから逃れる為に日本を出たのだ。７歳の時、母が亡くなり、その後父が連れてきた女に馴染めなかった。父とその女が楽しそうに笑うのがたまらず嫌だった。それでも私はその事を胸に納めた。

父にも義母にも普通に接し、大人しい良い子供だった。
ある日夢を見た。
炎にまかれ、断末魔の叫び声をあげる義母の夢だった。
何日か後、義母は灯油をまとって自らの命を絶った。父も火傷を負い、家も焼失したが、私は祖母の家に泊まりに行っていて難をのがれた。運が良いと皆から言われたが、私は知っていたのだ。こうなる事を。
中学の時の担任の車が崖から落ちる夢を見た。
いつもいつも私を馬鹿にしていた男だ。ネチネチと執拗に生徒を追い詰めて、表向きは生徒の為に生徒の為にと豪語する、偽善者の塊のような男だ。
私は何を言われても反抗する事のない生徒だった。言いたい事は山ほどあったが、言っても無駄な事も又解っていた。

気に入られている生徒にとっては良い先生であった男が実際に事故で亡くなったのは夢から二日後であった。亜樹達はどうなったのだろうか・・・
あの夢から三日後、ネットでそのニュースを目にした。
夫を切り刻んだ妻・・・
亜樹だった。正弘を殺害し、あろうことかばらばらに切り刻み死体を遺棄した。
私は思わず目をつむった。
予知夢、私の夢は現実を映し出す。その事にはじめて罪悪感を覚えた。

「あなたの心ね・・あなたの思い、あなたの願望・・」
「私の願望・・？」
義母をいなくなれば良いと願い、担任を死んでしまえと願い、亜樹を不幸になれと願ったというのか・・そしてことごとくそれが叶ったのだと。
S 夫人はテーブルの上に置いた水晶玉を覗きこんだ。
「お母様だわ。あなたをいつも守っている、若くて美しい人」
「母？」
私は水晶玉を覗きこんだ。そこには何も見えない。醜く歪んだ自分の顔が映し出される。
「私の邪悪な思いが母を蘇らせたのですか？母は私の為に力を・・？」
S 夫人は何も言わず私を見詰めた。優しいが鋭い目が私の胸を貫く。

母の夢を見た。私を見下ろす母の眼差しは柔らかい。
そして私は・・花に埋もれて眠っている。
百合の花の強い香りで目が覚める。今まで感じた事のない穏やかな目覚めだった。
「ごめんなさい・・私だけじゃなく、母さんも淋しかったのね」

私はもうじき永遠の眠りにつくでしょう・・・
次のお話は KEN さんにお願いしようかしら・・・